

後藤均平著

『ベトナム救国抗争史』

——ベトナム・中国・日本』

新人物往来社 1975年 309ページ

I

本書は著者の長年のベトナム史への関心を集大成したものであり、また日本人のベトナム史理解、さらには対アジア観をただそうと意図した啓蒙の書である。

著者のベトナム史に対する基本的な姿勢は、本書の序文に明確に示されている。その姿勢は、本書を貫く一本の力強い縦糸である。著者は言う。日本は太平洋戦争期アジアに対して侵略支配を行ない、また1960年代以降はベトナム戦争に加担してきながら、それを反省することもなく、アジアとの間に欺瞞的な関係を続けてきた。また日本は、他のアジア諸国とちがって、外国による支配とそれに対する抵抗の経験を持たず、国内的な統合や工業化の問題にわずらわされることもなかった。この意味において日本はアジアの孤児である。しかるに日本人はこのことを深く認識していない。日本人が従来の対アジア観を反省しなければ、アジアにおいて日本の果たす役割は、アジアのみならず日本の将来にとっても不幸である。

著者はこのような基本的認識に立ちつつ、「日本人自身の今日的課題であるベトナム問題を理解し、実践するため」のアプローチの手段として、「ベトナム史の学習」を行なおうとしている。著者はベトナム民族の歴史を、外国の侵略支配に対する抵抗の歴史とみなし、「こんにちのベトナム人民が、諸外国の侵略者に対する闘争」を貫徹し得たのも、「長いかれらの抵抗の歴史にしっかりと支えられている」からであると主張する。そしてそのようなベトナム人の「抵抗をささえているエネルギー」の根源を問いただそうとする。したがって本書は、「ベトナム史の、いわゆる概説書」ではなく、「外国の侵略支配に対する抵抗、闘争、という切り口に焦点をあわせて、その時期の闘いのあり方をいくつかとりあげて、学習し、「自分の目でたしかめ」ようとした著者の自省の書となっている。

ただし本書において叙述の中心は、近・現代のベトナム民族の抵抗の歴史に向けられているのではなくして、

それ以前の中国に対する1800年におたる抵抗の歴史（その内1000年が中国支配下での抵抗の歴史）に向けられている。しかもその1800年の歴史の中でも、年代が古いほど叙述の比重も高くなっている。本文の章構成を示せば、1, 2, 3世紀にそれぞれ1章ずつが割り当てられているのに対して、それ以降は4~9世紀の500年間に1章、10~18世紀の800年間に1章がさかれているにすぎない。近現代史にほとんど注意の払われていないことは、本書の題名に比して、羊頭狗肉の感をまぬがれ得ない。また序文における問題提起に照らして、日本とベトナムのかかわり合いについてほとんど言及されていないことも、残念である。

しかし以上のような問題点をはらみつつも、1~18世紀のベトナムの抵抗闘争の歴史を追う中から、現代にまで連なるベトナム人の抵抗の根源をえぐり出し、また今日にも当てはまり得る普遍的な問題を指摘しようとする著者の姿勢は、本書を貫いている。読者が心打たれるのも、そのような著者の気魄に対してである。

II

著者のベトナム人の抵抗の歴史を学習する際に用いる方法は、「史料や、これまでの研究成果を、自分の目でたしかめ、再検討しながら」納得してゆく方法である。そしてその作業の過程で利用したのは、主として中国人の手になる史料である。著者は支配占領者によるこれら史料を、「支配される側、一般庶民の立場」から読みかえすことによって、著者の目的を達成しようとしている。著者のこのような作業は、13世紀以降にベトナム人によって編纂された史料や、近年になってヨーロッパ人によって発掘された考古資料によって、補強される。そして読者は史資料と史実の関係を、歴史家の楽屋裏に立ち入って垣間見る機会を与えられ、興味深い。

その最も端的な例は、6世紀の趙光復の評価(208ページ以下)に表われている。6世紀のベトナムでは、李賁が梁の支配に抵抗して一時独立国家を建てた。これは中国の鎮定軍の前に破れ、中国の支配が再び復活している。このことはまぎれもない事実であろうと著者も認めている。しかるに15世紀に編纂されたベトナム側の文献『大越史記全書』は、李賁の敗北を否定し、さらに彼を継ぐベトナム主権者の存在したことを主張する。それが李賁の部将と言われる趙光復(趙越王)である。

このような『全書』の叙述に対して、「20世紀前半のフランス東洋学」の雄マスペロは、鋭い批判を加える。

そして趙光の復記事は、14世紀に編まれた『粵甸幽靈集』に載せられている民間説話の類に基づくものであり、架空の記事であると結論づける。著者も趙光復が実在の人物ではないことを認めている。しかし著者の関心は、マスペロ流の事実考証をこえて、15世紀のベトナム人がなぜこのような架空の英雄を創り上げ、6世紀の歴史に挿入せざるをえなかったのか、という点に向かう。著者によれば、趙光復は、明の侵略に抵抗していた15世紀のベトナム人が、その「国土光復闘争」のために「必要あって創り上げた抵抗の所産である」（傍点原文のまま）ということになる。しかも6世紀のベトナム社会には、趙越王こそ実在しなかったものの、そういった架空の人物を設定するにふさわしいほどのベトナム人の自律的な発展があったことをも、著者は指摘している。

このようにして著者は中国人やマスペロの歴史観を逆転し、ベトナム人の立場から歴史を再構成しようとしている。

だが一般的に言って、これらの史資料を渉猟してもそこから得られる情報は、断片的なものにしかすぎない。いきおい著者は大胆な推論を、幾つかの重要な場面で行なわざるをえなくなる。一般に史資料や研究の蓄積の乏しい研究分野において、このような冒険は不可避であり、それ自体は非難さるべきものではないであろう。むしろその勇気をこそ称讃すべきである。要はそのような推論が、より合理的・説得的であり得るか否か、と言う点にかかっている。以下に、著者が本書の中で導き出している論点について、順次見てゆくことにしよう。

III

第1章において、著者は1世紀ベトナムの「土着社会」とそれを統治する中国人支配者との基本的な関係を素描してみせる。ベトナムの土着社会は雑田を耕作する民、すなわち雑民と、それを支配する土着有力者、すなわち雑將とよりなっていた。このような支配構造は、社会の自律的發展に伴って、雄王（すなわち雑王）伝説を生み出すにふさわしい展開を示すに至っていた。

このような発展途上に、南越ついで漢の中国人支配がおおいかぶさったのである。中国人のそもそもの目的は南海貿易の独占にあった。ベトナムの農業は、生産力がまだ低かったので、直接の収奪目標とはされなかった。したがって土着社会内部の統治は雑將の手に委ねられた。しかし中国からの農具や耕作技術が導入されるに従って、農業生産力は徐々に拡大した。これは一方で雑將

の権力基盤を強化するとともに、他方で中国人がこの生産力の向上に着目して従来の間接的支配から直接的収奪に転換するのを促した。この両者の対立が、後40年の徴姉妹の反乱の根本的原因であった。

この反乱の鎮圧を通じて、中国は雑將の伝統的權威を奪い去り、ベトナムを直接的に支配する体制を整えた。

著者がここに展開している。支配—反乱—支配の再編成、と言う分析はみごとである。

IV

しかしながらこれでベトナム村落社会の自律的發展や土着有力者層の存在そのものが、全く抹殺されてしまったわけではない。著者は引き続き第2章において、徴姉妹反乱鎮圧以後の、中国による直接支配とその下でのベトナム社会の「中国化」の意味を検討している。著者は第1に、2世紀に続発するベトナム人反乱を取りあげ、その原因を中国人貪官汚吏の悪政に帰する歴史観を否定する。反乱の根源は、中国による郡県官僚支配体制そのものに求められねばならない。中国人官吏によるベトナム支配は「華夷の差別思想」に支えられており、「ベトナムの住民に対する一片の愛情も、見いだされない。土地の物産と、それを獲得・加工するために住民を酷使する」だけのものであった。したがって中国人の官吏の善政なるものも、中国支配体制にとつての善政にすぎないのであって、彼ら官吏は「純乎とした中国式差別感をもって……ベトナム社会に臨んでいた」のである。これに対してベトナム社会のがわには、こういった中国人による郡県支配とは、「おのずからことなる独自のもの」があった。（彼らの抵抗の根本原因は、ここに求めねばならない。）

第2に、中国から移住してきて定着した中国人は、ベトナムに土着化し、土着の支配者層の一部、すなわち、「ベトナム人の自律的な行動の一翼をになう者」を構成した。したがって彼らは中国の郡県支配に抵抗する勢力の一つとなったのである。

第3に、中国の技術や文物が、定着漢人の流入とともにベトナムに伝わったが、それはベトナム社会の中国化をいみしたわけではない。中国の文物制度は、ベトナムの住民が中国支配に対する抵抗の過程で、みずからの意志において受け入れたものである。

著者は定着漢人と、一時的に避難亡命してきた漢人とを峻別する。前者はベトナム社会の一員であり、その住民と共通の利害を有する点において、後者とは異なる。

第3章で論ぜられるのは、定着漢人の一人士^{ししやう}燮一族が184年以來50年間にわたって、中国中央政權から實質的に独立した太守政權を維持し、域内に平安をもたらした事実についてである。この政權の存続を支えたのは、中国文物の移入や、亡命中国知識人の存在にあるのではない。士氏が南海貿易を掌握したこと、そしてその「在地的性格」のゆえに土着の支配勢力の支持を勝ち得たことが、その政權の支持基盤であった。したがってベトナムの民間伝説において士燮は、王として扱われるのである。しかし、三国時代の動乱の中で一息ついた呉が士燮の死後、士氏政權の処理にのりだすと、後者は内部崩壊してしまった。著者はこの内部崩壊について、士氏はやはり「中国式教養を身に付け、郡県官僚としての意識をもっていた」こと、また住民を「収奪する支配者にほかならない」存在であったことを、原因として指摘している。「中国の支配と対決するためには、その指導者をみずからの社会のなかから出現させねばならなかったのである。だがここにおいて定着漢人を土着社会の一員とみなすのか否か、著者の態度はやや一定しない。

第4章では、ベトナム人社会の中からの指導者が現われ、自立への道を一步一步踏み固めてゆく様が描かれる。5世紀の杜^と瑗は土着の人間（定着漢人の子孫）として初めて交州刺史（交州の最高官職）となり、6世紀の李^り賁（前述）はついに反乱して一時的に独立を宣言するに至った。これ以後中国の支配は、再び間接的支配に戻らざるを得なくなった。このような「放任的支配」の状況は、唐代の安南郡護府の支配においても踏襲される。ベトナム社会の自律的發展は、すでに中国人王朝の支配体制を突き破る勢いを示し始めた。

V

このような自立への歩みは、10世紀の独立に至って、ついに完成した。以降18世紀まで李^り・陳^{ちん}・黎^{れい}・タイソンの政權が続く。しかしこの間にも、中国は折につけて再侵略の野望を実現しようと試みる。10世紀以降の歴史は、中国の再侵略から独立を守ろうとするベトナム人の救国闘争の歴史である（第5章）。

だがこの闘争において、ベトナム人全員が一致団結していたわけではない。中国に協力し、あるいは投降するベトナム人、すなわち越^{べつ}奸が必ず存在した。したがって侵略に対する抵抗闘争は、同時にベトナム社会内部の越奸克服の闘争でもあらねばならなかった。この問題は近現代のベトナム史にも連なっており、著者の指摘は鋭い。

著者はついで、13、15、18世紀の抵抗闘争を取り上げて、それがベトナム農民の闘争と結びついていたことを指摘する。

だがここで読者は、この第5章がそれ以前の章と、いささかトーンを異にしていることに戸惑うであろう。なぜならばそれ以前の1～9世紀の闘争の分析において、著者は土着の支配者層全体、そしてそれと住民総体とを一体のものとして扱ってきたからである。すなわち1～4章における著者の視点は、「一般庶民の立場」にあったと言うよりもむしろ、独立政權創出の努力を試みる土着の支配者層に向けられており、土着社会における支配者層内部の分裂、あるいは支配者と農民の対立については、構造的な分析を行なっていない。著者の序文における主張からするならば、第5章に示されたような立場をこそ、第1章の記述から貫くべきではなかったであろうか。

この問題はさらに根源的には、ベトナム社会が不断に自律的發展を続けてきたことを指摘していながら、その發展を促した内在的な構造に、著者がほとんど足を踏み入れていないことと、関連してくるであろう。無論この点は著者も序文で断わっており、今後その成果を期待すべきものである。

さらにもう一つの難点を敢えて上げれば、それは著者が「インドシナ半島東岸地帯に健在して、ベトナム史の構成と發展に重要な役割をにな」ったと指摘している林邑（チャム）の運命について、評価を下していないことである。ベトナムの南進、すなわち林邑を併呑し、カンボジアを蚕食していった歴史を、どのように評価するのかは、確かにデリケートな問題ではあるが、ベトナム社会の發展を階級対立の観点から把え直してゆけば、あるいはそれに対する解答の鍵を見出すことができたかもしれない。

以上いくつかの不十分な点はあるにせよ、中国支配下のベトナム史を詳細に論じ、世に問うた本書の意義は大きい。また読者を漢文史料になじませるために種々の工夫を凝らすなど、心の行き届いた配慮が施されている。

（東京大学大学院 白石昌也）